



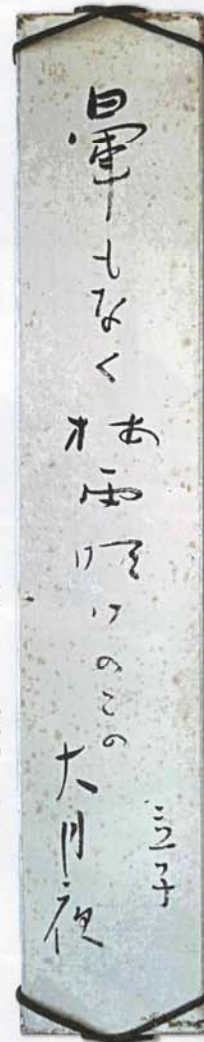
法の水荃 (50)

大正大学講師 高橋秀城

暈もなく
梅雨明けのこの
大月夜
(星野立子)

長かった梅雨も過ぎ去り、くつきりとした輪郭の雲が、青空の海を泳いでいます。「梅雨明け十日」と言われるように、梅雨

できる光の輪を意味します。「暈」は「傘」と同語源とされますが、傘も持たず、雨の心配もなくなつた夜空に、まどかな満月が輝いていたのでしようか。淡く臙気だった月が、梅雨明け後はすっかり雲のベール脱ぎ捨て



星野立子先生より賜る貴重な俳句の短冊

が明けてからの数日は、好天が続くことが多いようです。

この冒頭の句は、父が高尾山での修行中、高浜虚子の息女で俳人の星野立子先生（一九〇三〜一九八四）より頂戴したものです。「暈もなく」の「暈」は、「太陽や月の周りに

夏の夜空を清かに照らす光景が思い浮かびます。八月に入ると、すぐに立秋が訪れます（今年は八月七日）。朝夕に感じる始める風の心地よさに、爽りの秋の到来を待ち望みます。この季節は、夏の行事を楽しみながら、移りゆく自然に心澄ませ

る折節でもあるのでしよう。初秋の五日の今宵こそ亡き人数のほどは見えけれど（西行物語）

（秋の初めの陰暦七月十五日の今夜こそ、祖先を送る火によって、亡くなつた人の数を知ることができるよ）

八月も中旬になると、月遅れのお盆（盂蘭盆）を迎えます。最終日に焚かれる「送り火」は、亡き親族との別れを惜しむように瞬いていたのでしよう。この歌を詠んだと伝えられる西行（一一一八〜一一九〇）は、お盆の揺らめく炎に、御先祖様の面影を重ねていますとところで、詩や小説な

「綺語」をめぐることは、次のような話があります。昔、比叡山の僧惠心僧都（九四二〜一〇一七）は、修行の他に関心がなく、佛法を信じていて、飾つた言葉で作られた小説や物語など憎んでいました。惠心の弟子の稚児（寺の子供）の中に、朝夕に

心澄ませせて、和歌ばかりを詠じている者がいました。惠心は「稚児というのは学問をするのが本来の姿である。この稚児は和歌ばかり好んでどうしようもない。他の稚児が真似をして修行を怠つてしまうので、明日、里へ帰そう」とお考えになりました。

稚児は師の思いも知らず、月が冴えて静かな晩、縁側に立ち出ると、手水（浄める水）を使おうとして歌を詠みました。

手に結ぶ
水に宿れる
月影の
あるかなさかかの
世にもすむかな
（掌にすくつた水に映っている月影が儂いように私たちは有るのか無いのか分からないような世の中に住んでいるのだなあ）

僧都はこれを耳にして、歌の内容と言ひ、姿と言ひ、心に染み入るほど感動したので、この稚児を側に留めることにしました。

折り折りの記 (84)

波多野 重雄

「夕焼け小焼け文化農園」に螢狩

雨上がりの夕、恩方（詩人・童謡作家の、村雨紅の生誕地）の夕焼け小焼け文化農園に螢（源氏）が乱舞していた。

平成八年四月、都の「TAMA Aらいふ21」（多摩が神奈川県から移管百年）の事業で、約八万坪の体験農園（野外キャンプ場等）である。

園児らの薩摩芋畑や水田の水車を廻す水を谷川から引揚げ、同時に川蟻をその細流に放し、螢を育み共感を呼ぶ。夕闇に若き男女がそよ風に浴衣を翻し螢狩りの姿は夏の一幅の風物詩である。

（高尾山健康登山の会々々長）

た。またそれ以来、自らも歌を好きになって、代々の和歌集にも、僧都の歌が入る程になったという事です。

（無住『沙石集』）

惠心僧都は、稚児の歌によって心を改めました。和歌の中に、世の中は常に移り変わるといふ「無常観」の教えが含まれていふことを感じたのでしよう。稚児が口ずさんだ歌は、実は紀貫之（八七二〜九四五）が詠んだものですが、日頃から仏の

教えが込められた和歌を暗誦し、心を研ぎ澄ませていたことが想像されます。それは仏道修行に反するものではなく、仏の深遠なる教えにつながっているものだったのでしよう。

西行はお盆に照り輝く月を見ながら、次のような歌も詠っています。

いかで我
今宵の月を
身に添へて
死出の山路の
人を照さん

（西行『山家集』）

（何とくして私は、今宵の月を側に置いて、死出の山路（険しい山道）を越えていく人々を照らしたいものだ）

雲のない大月夜は、仏様そのもののお姿です。秋の深まりとともに、さらに輝きを増す月光のように、自らの心月にかかっている暈も、少しずつ脱ぎ捨てていきたいものです。

（栃木北部教区普濟寺中）

訪中国海南島(一)

遊南山寺

厚木市 荒井 一雄

中国海南島を訪れて(二)
南山寺に遊ぶ

巨大なる真白き観音像は、碧き海に映ゆ。青き空・白き雲は、観音像を、すっぱりと包み込む。礼拝、礼拝、復た、礼拝。大乗仏教の御教へは、かくも小さき島中に、脈々と生き続きをることよ。・・・

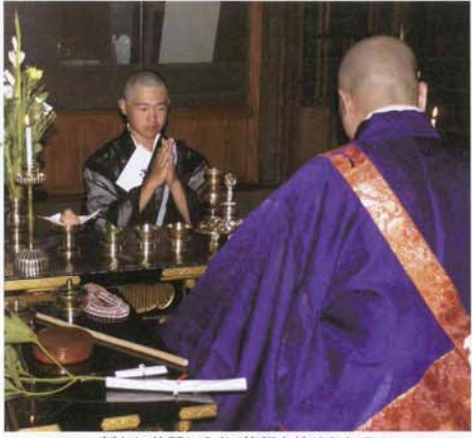
大白観音映碧海
青天白雲包像背
礼拝礼拝復礼拝
大乘教義生島内
蘇東坡の
思ひ願ひを翼にのせ
おほぞら翔ける白き鶻

得度式厳修

七月二十七日の早朝、高尾山大本堂に於いて、菅谷秀文執事長戒師のもと、得度式が執り行われました。

得度者は、山梨教区・慈眼寺・宮城秀栄住職法資・宮城慶信さん（十六歳）です。

新たに仏門に入られた新発意の、今後の様々な修行での精進を願うものであります。



新たに仏門に入り、修行を始められる